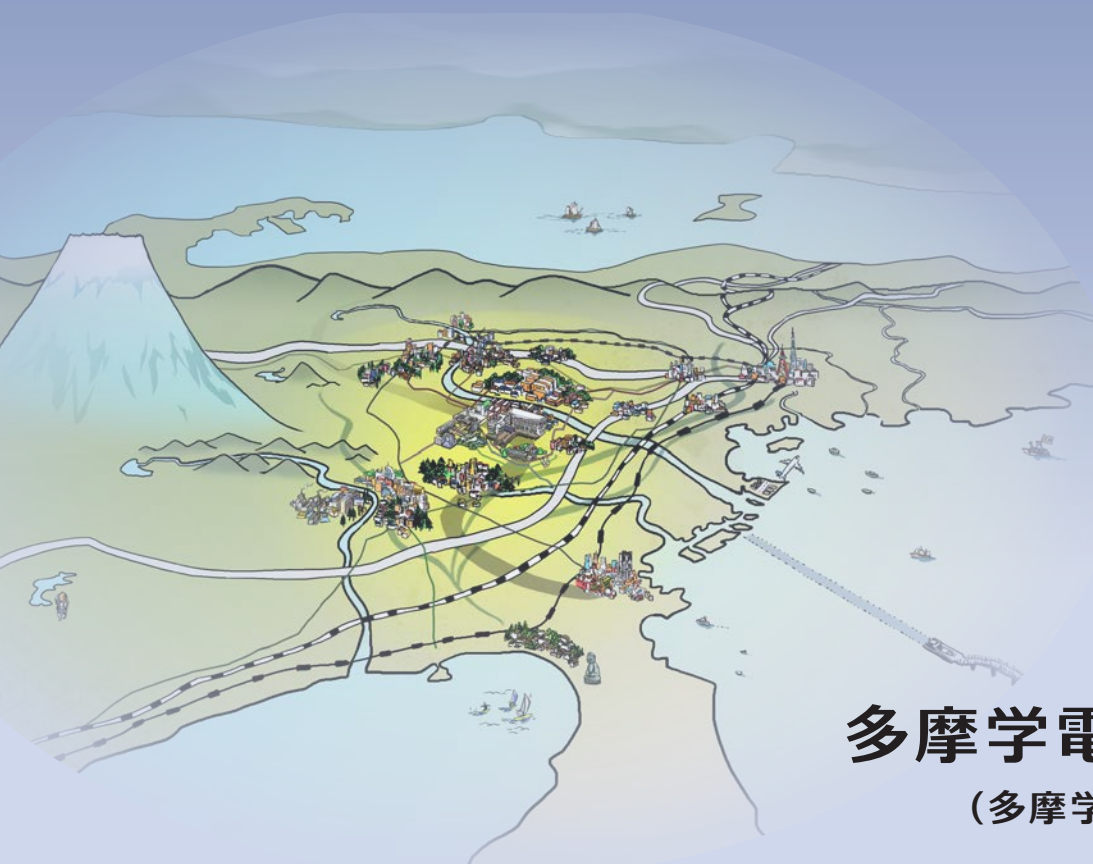


“多摩” 人物紀行

— 多摩の人物記念館を訪ねて —

多摩大学経営情報学部

教授 久恒 啓一



多摩学電子新書 vol.6
(多摩学電書)

「多摩」人物紀行

---多摩の人物記念館を訪ねて---

久恒啓一

目次

- 「多摩」人物紀行①—武者小路実篤（調布市）・・・ 3
- 「多摩」人物紀行②—吉川英治（青梅市）・・・ 9
- 「多摩」人物紀行③—平櫛田中（小平市）・・・ 11
- 「多摩」人物紀行④—宮崎駿（三鷹市）・・・ 17
- 「多摩」人物紀行⑤—村野四郎（府中市）・・・ 19
- 「多摩」人物紀行⑥—水木しげる（調布市）・・・ 25

「多摩」人物紀行 ①

武者小路実篤（調布市）—武者小路実篤記念館

龍となれ 雲自づと来たる

○陸軍大将になっても始まらない

武者小路実篤（1885年～1976年）という名前は、白樺派という美しい名前とともに私たちの世代にとっては、あこがれの対象だった。

実篤は1885年（明治18年）生まれだが、1976年（昭和51年）に満90歳で没する直前まで『私の美術遍歴』を最後に著書を刊行し続けているから、私は高校生から大学生の間に、同時代でこの人の本を読んでいたということになる。

23歳の処女出版『荒野』から数えて67年間、作品は6000をゆうに超えるというから、長寿で仕事を続けているということは凄いことだと改めて感じた。武者小路実篤の研究者として有名な中川孝によると、最初の単行本の刊行は1908年（明治42年）なので、1959年（昭和34年）の74歳の時点で50年経っているが、その時点で、戯曲117編、短編小説131編、中編ないし長編小説26編、伝記小説9編、感想、随筆、詩集など92編、著書の総数は500冊とある。

子爵であった父・実世は実篤が数え年の三つにならないうちに「この子をよく育ててくれる人があったら！ この子は世界に一人という人間になるのだが」（『現代作家伝』村松梢風）と言ったという。

後にこの大それた予言を知らされた実篤は、「陸軍大将になっても始まらない」「総理大臣になると思ったこともあったが、それも総理大臣が最後の目的ではなかった。自分はもっと大きい空想家だった。伊藤さんや山縣さんになっても始まらないと思っていたのだ。」そして、「アフガニスタンの王様になるくわだてをしたものだった」と言っている。

24歳のときの日記には、「60歳まで健全でいたなら必ず何かしてみせる。何かして見せるといふのは、一つの武者主義をつくって見せるといふことである」と書いている。

○実篤の「失業時代」

学習院中等科で実篤（同時17歳）と志賀直哉（当時19歳）は出会い、後に

「十四日会」を組織する。帝大中退後の25歳のときには、文学同人誌「白樺」を志賀直哉らと創刊している。こういう雑誌は長く続かないことが多いのだが、1923年（大正12年）の関東大震災直前まで実に160号を数えるから、その影響は大きかった。

昭和に入ると、実篤はプロレタリア文学の台頭によって次第に発表の場を失っていく。特に1929年（昭和4年）から1932年（昭和7年）にかけては原稿の依頼がなく、自身で「失業時代」と自嘲する時代だった。

この時代には神田表猿楽町に自身の店、日向堂を開いていた。美術品と自著の出版を行ったが、本は売れず、閉店時には借金だけが残った。

実篤はこの頃から1936年（昭和11年）頃にかけては、偉業を成し遂げた人物のことを書いている。『井原西鶴』は100版以上を重ねるほど読まれたし、『釈迦』『二宮尊徳』なども話題になった。それ以外にも『孔子』『西郷隆盛』『トルストイ』『墨子』『空海及びその他』『大石良雄』『日蓮』『牧野元次郎』などの著書をもっている。「新しき村」東京支部にあてた葉書には「トルストイは矢張り好きです。愛しています」という記述がみえる。

昭和十年代以降になると、実篤自身の成熟とそれに伴う関心の広がりの中で、青春小説から脱し人生論的な趣のある著書が多くなる。『人生論』『人生の意義』『人生問答』『愛と美の人生論』『生きるとはすばらしいことだ』『幸福論』『行きがひのある人生』『我が人生の書』『人生読本』『人間論』……。こういった本が若者に読まれた。

戦後、著作の中心は随筆や美術論、詩に移っていく。『真理先生』『白雲先生』『空想先生』や、宇野重吉主演で劇団民芸が上演した『馬鹿一の一生』などがある。

○「新しき村」と「武者主義」

武者小路実篤が1918年（大正7年）に「新しき村」（人間が人間らしく生きるための運動）を提唱し、その年の11月に宮崎県に村が創設されて、すでに90年以上が経った。

この地は中世の山城跡で6.5ヘクタール余りの広さがあったが、ほとんどが山林と原野であり、農業用水や飲料水の確保に苦勞することになった。創設時大人18人、子供2人の計20人で始まったこの村では、1929年（昭和4年）頃には50人余りの人が生活するようになる。

実篤はここで二人の子を設け、『友情』『或る男』『耶蘇』など数十冊の本を書いている。当初の必要資金は、実篤の原稿収入をはじめ、村外会員、そして志賀直哉、柳宗悦、岸田劉生などの白樺同人や篤志家の支援でまかなわれていた。岸田は経済支援のための画会を開いてもいる。

実篤は、創設から 7 年間にわたって会員とともに生活をしているが、村を経済的に支える原稿執筆に専念するため、村を出ている。「新しき村」の創刊や、「新しき村出版部曠野社」の設立などもされている。また美術活動、演劇活動も盛んだった。現在この地では、「日向新しき村」として三家族五人が生活している。

実篤は、「美しき村というのは……皆が協力して共産的に生活し、そして各自の天職を全うしようというのだ」「人間らしい生活というのは、人類の一員としてこの世に生活してゆくのに必要なだけの労働を先ず果たして、そしてその他の時間で自分勝手の仕事をしようというのだ」と『美しき村の小問答』で語っている。

農業を中心とした共同生活で、運営や生活に関わる仕事は分担するなど、各自が義務労働を果たした。衣食住や医療、教育を保障し、労働時間は一日八時間（後に六時間）と決めている。それ以外の自由な時間は芸術活動や創作活動にあてた。テニスやレコード鑑賞などの趣味を楽しむこともできた。生活は苦しかったが、精神的には充実した生活であったという。また、多数決による解決法をとらない運営を目指した。

最初の妻・房子は、我孫子に建てた新居を売って「新しき村」の土地の購入費にあてるという実篤の案に同調し、実篤も大いに喜んでいる。二人とも太陽に向かうという意味の日向という名前、日本の歴史の発祥地という伝説に魅力を感じ、自分たちの手で新しい日本史の 1 ページをひらこうという使命感に燃えていた。

しかし、房子の奔放な性格は性的な面も含めあらゆる面で摩擦を起こした。1922 年(大正 11 年)に実篤は房子と離別。同年新入村の飯河安子と再婚した。房子は、村内の男と再婚した。1939 年(昭和 14 年)には、ダム建設に伴い、村を出る者もあったが、房子と新しい夫は残っている。

1938 年(昭和 13 年)、実篤は埼玉県毛呂山町葛貫に「東の村」を創設した。前年、ダム建設のために一番肥沃であった土地の一部が水没することになったためである。太平洋戦争が終わると実篤は、いち早く新しい時代の村づくりに取りかかる。養鶏、水稻、畑、乳牛、果樹と村はひろがっていく。1948 年(昭和 23 年)には「財団法人新しき村」を設立している。

実篤はずっとこの財団法人の理事長を引き受けている。創立 40 周年の 1958 年(昭和 33 年)には、村の農業活動による生産物と収入で村内の食料や生活費がまかなえる自活を達成する。

この「新しき村」の運動が実篤の言う「武者主義」であった。実篤は、文学と芸術と人生論と同様に、生涯この運動にも深く関わっている。

「新しき村に就いての対話」では、「以前はあることについて疑問を挟めばそれ

でよかった。解決は他人に任せて安心だったが、それに自分であるところまで答えを与えたくなくなった」と語っている。この文章は、A という人物と先生との対話という形式になっており、「先生は相変わらず楽道家ですね」「先生は相変わらず空想家ですね」という問いかけに対して、先生は「相変わらず空想家だ」「いやあ、空想家ではない」と変化しながら、「新しき村」の意義を説明しようとしている。

また、「僕は思想家とか宗教家とか言われるほうがうれしい」とも言っている。自分自身を「特別な人間」と認識している実篤には、人の世を根源的に考えるところがあり、人々を救う思想や宗教に大いなる関心があったからであろう。

○「泉と水」のある終の住処

武者小路実篤記念館は、京王線仙川駅から歩いて10分のところにある。武者小路実篤が住んだ1500坪の土地は、現在では実篤公園として整備されていて、その一角に住んでいた家があり、さらに1985年（昭和60年）に生誕百周年を記念して建てられた記念館がある。

起伏があり、植物や花が咲いており、池もあり、この自然豊かな公園は昔の武蔵野を偲ばせる。改装中で家の中までは見られなかったが、実篤が愛した池のある庭の側から中をうかがうことができた。晩年になったら「泉と水」のあるところに住みたいという念願を実現させた家である。越してきたのが70歳で、家族や友人に囲まれて仕事を続ける幸せな期間をこの地で過ごしたのである。野桜の大木が目についたが、木々の紅葉もきれいだった。ベランダから低い地にある庭と池を楽しむ実篤の姿が見えるようだ。

庭の池の鯉を見ながら進んで小さなトンネルをくぐると、記念館が姿を現した。

最初の訪問ではちょうど展示替えのためメインの展示室を見ることができなかったが、裏の小展示室に案内してもらった。ここにはビデオのコーナーがあり、何本もの紹介ビデオがあり、それを四本ほど見ながら疲れを癒やした。

「仙川の家」は、この最後に住んだ家をテーマとしたビデオである。早起きで、朝は毎日原稿を4～5枚書いて、午後は絵筆をとって書画をかく、そして来客に会う、という生活を送った。普段は妻と二人きりだったが、子や孫を含めると15人いて、よく家族がここに集まったらしい。三女の辰子はビデオの中で「したいことをしている生活でした」と回想している。

「終の住処」というビデオでは、1500坪の土地と建物を詳しく紹介している。ピカソから贈られた「ミノートル」、庭の桜と紅葉、サンルーム、月見台……。 「秘蔵映像」では、「美しき村」の様子、初めての洋行時の見送りの様子などを

見ることができた。

武者小路実篤といえば、あの独特の温かみを感じさせる書画を思い浮かべる。若い頃から美術の鑑賞は好きだったが、自ら絵筆をとったのは40歳頃からだ。味わいの深い生命賛美の作品が多い。独特の画風と、率直に思いが吐露された「讚」（実篤が野菜や花などを描いた絵に書き添えた言葉）は人気があった。

「龍となれ 雲自づと来たる 実篤」

「仲よき事は美しき哉」

この二つは、人口に膾炙した言葉であるが、実篤は天真爛漫な語り口で言葉を書きつけていく。晩年には年齢を入れるようになった。

「自然玄妙 81歳」

「人見るもよし 人見ざるもよし 我は咲く也 84歳」

「人生の旅人に幸あれ 87歳」

「どかんと坐れば 動かない 89歳」

年齢があることによって不思議なことに、言葉に重みが加わってくる。

「満八十になって」という随筆がある。「あと10年生きられれば、僕は僕風の美術館をたてたい希望は失っていない」「入って出るまでに僕の生きた本に接することが出来るような特別な小美術館」と書いている。先日、埼玉県入間郡毛呂山町の「財団法人美しき村」を訪問したときに、「武者小路実篤記念 美しき村美術館」を見学した。実篤の希望した美術館が実現していた。

実篤記念館で買った図録を見ると、志賀直哉と写った写真が多い。1906年（明治39年）に行った志賀直哉との徒歩旅行の写真などで、二人は体格も良く男前である。「白樺」の新年会、創刊十周年記念、晩年の写真など、常に志賀直哉とともにいる。二人は生涯の親友だったと感じる。

また、「白樺」関係の記念写真には日本民藝館を創った柳宗悦が感性の鋭そうな目をして写っているのも目を引いた。高村光太郎、岸田劉生、木下利玄、バーナード・リーチらの姿も見える。「仲よき事は美しき哉」と好んで書画に書いた実篤は、妻の安子が亡くなったわずか2カ月後に永眠する。

○「世界に一人というおもしろい人間」になりたい

実篤は小説、戯曲、詩、評論、随筆、雑感など6000を超える作品を発表したのだが、「武者小路実篤 この人は小説を書いたが小説家と言ふ言葉で縛られな

い哲学者思想家乃至宗教家と云ってもそぐはない そんな言葉に縛られないところをこの人は歩いた」という中川一政の「この人」という詩が、よくこの人の歩みを表していると思う。

記念館で買った『人生論』を本当に久しぶりに読み直したい。作品解説は亀井勝一郎だった。この名前も懐かしい。

実篤は、人生の前半は作家として多くの書物を書き、大成した。また、「新しき村」という運動の創設者となり、その運動を長く続け、幼少の頃に夢見た「アフガンの王様」にもなった。

そして人生の後半には「画人」ともいえる独特の存在になった。実篤関係の記念館や美術館を巡ると、ある種の風格と味わいのある絵と、それに添えた天衣無縫の言葉に惹きつけられる。仙川で美しい自然に囲まれて絵を描いた日々は、画人と文人の両方を生きた本当に幸せな日々だったろう。

実篤が2歳のとき、父は死んだ。死ぬ少し前に「公共（実篤の兄）はわるくいって大使にはれる」、実篤を見て「この子をよく育てて呉れる人があったら世界に一人という人間になるのだが」と言ったことは前に述べた。

後年、祖母や母からこのことを聞かされた実篤は、父の言葉を信じ、誇りとも、父を嘘つきにしたいかと思っただけで生きてきたという。

「世界に一人という人間」「世界に一人というおもしろい人間」であるその人間が、様々の形をとってこの世で仕事をしたということだろうか。子供の頃から唯我独尊という意識が強烈に存在した武者小路実篤は、年齢で区切った断片からではその本質は見えない。長い年月をかけて変身を続け成熟し、最後に振り返ると、たった一人しかいない独特の人物であったことがわかる、そういう遅咲きの人物であった。

青年時代の「白樺」から始まった武者小路実篤は、90歳までという長い時間をかかえて、多方面の才能を開花させ、他に類例のないタイプの人生を送ったのである。

「多摩」人物紀行 ②

吉川英治（青梅市）—吉川英治記念館

国民作家と呼ばれるほど読者の多かった吉川英治（1892-1962年）の記念館を青梅に訪ねた。この記念館のある場所は当時は西多摩郡吉野村といった。多摩という名称は随分と広い地域を指しているのだと改めて実感した。野村という庄屋の家を自宅として使用した土地と家がそのまま記念館となっている。ここを吉川は草思堂と名付けた。吉川英治は疎開先のこの梅の里を愛しており、2千坪にのぼる土地と家を気に入っていた。母屋は外からしか覗けないが、「吾以外皆師」という吉川英治の座右の銘を見ることができる。

母屋にくっついた形で明治中ごろに建設されたという洋館を吉川は書斎として利用していた。戦後しばらく筆を折っていたが、「宮本武蔵」とともに代表作とされる「新・平家物語」を58歳からこの書斎で執筆している。方形の書斎は、中央に座卓が置いてあり、原稿用紙を押さえるぶんちん、眼鏡、虫眼鏡を載せた地図、日本医学史などの厚い書籍や辞書類が卓上に並んでいる。

実家の没落で11歳で小学校中退となった吉川英治は漆器職人など職を転々としたが、32歳から本格的に作家の道を歩みだす。「剣難女難」、「鳴門秘帳」、「親鸞」、などを書き花形作家となる。昭和10年から4年にわたって朝日新聞に連載した「宮本武蔵」では、剣禅一如の道を歩む新しい武蔵を書いた。この連載は、求道、克己、そして絶え間ない向上心がテーマであり、人生の書として人気を博した。また新書太閤記、三国志など吉川は新聞連載小説の名手だった。そしてこの地で7年間にわたり大作「新・平家物語」に没頭する。この大作を書き終えたとき、「あとかたもなきこそよけれ湊川」とその心境を記している。

吉川は昭和35八木治郎アナウンサーのインタビューに「読者は自分を読んでいる」と答えている。「読者の呼び水と僕、それが小説の書き方の秘密」だった。そういう工夫を吉川は小説の中に盛り込んだのだ。そしてどのような作品にも、今現在という時代を投影させていた。「吾以外皆師」という言葉とともに「大衆即大知識」という言葉も好きな言葉だった。まさに大衆とともに生きた国民作家だった。

吉川英治は恋愛よりも、家族愛を描くことに自らの資質を自覚していた。親子、兄弟などの骨肉の愛情を描くことがテーマだった。骨肉愛に対する意識は没落時を家族の団結で乗り切ったことも影響している。初めの不幸な結婚を経て、大きく年の離れた賢夫人・文子との結婚によって、吉川の仕事は順調に伸びていく。和やかで幸せな家族をきずいていたことは、家族の写真が示している。円満な家庭を喜んでいたのは、「子らは皆よき母もてり この父は机ぐらしのそとにあれども」というユーモアと愛情のこもった歌からもわかる。

「外国物を翻訳したり、江戸文学を焼き直すよりも、自分の考えのほうが、遥かに、すぐれていると、僕は、つよい自惚れを持っている」と吉川は語っている。正史は信用ならない、とも言っている吉川は、自分の頭でどこまでも考える人だったようだ。

「逆境に育ち、特に学問する時とか教養に暮らす年時などは持たなかった為に、常に、接する者から必ず何か一事学び取るということ忘れない習性を備えていた。---彼が学んだ人は、ひとり信長ばかりでない。どんな凡下な者でも、つまらなさそうな人間からでも---我れ以外みな我が師也。としていることだった」。これは新書太閤記にある秀吉を描いた部分だが、これは吉川英治自身でもあった。

「夫婦の成功は、人生の勝利です。人間の幸福なんていうものは、この辺の所が、最高なものではないでしょうか。...、帰するとことは、平凡なものです」という感慨が吉川にはあった。仕事に恵まれ、よき伴侶に恵まれ、骨肉愛を確かめた吉川英治の人生は、本人にとって満足のゆくものだったに違いない。

「多摩」人物紀行 ③

平櫛田中（小平市）—平櫛田中記念館

実践、実践、また実践。

挑戦、挑戦、また挑戦。

修練、修練、また修練。

やってやれないことはない。やらずにできるわけがない。

今やらずしていつできる。やってやってやり通せ。

○「六十、七十は洩垂れ小僧 男盛りは百から百から」

前から行きたかった東京都小平市の平櫛田中彫刻美術館を訪ねた。一橋大学の近くで玉川上水の流れる閑静な住宅街に、二階建て地下一階のモダンな展示館と、自宅だった和風平屋の記念館が併設されている。平櫛田中(1872年～1979年)という一風変わった名前になったのは、田中という本来の姓を、養子に行った先の平櫛という姓の下につけて名前にしたという事情からである。

1868年(明治元年)の神仏分離に伴い、従来神社に混淆されていた仏寺はことごとく分離され、仏教はいちじるしく衰退した。また仏教美術も破棄される運命となり、仏像の需要が減退し、仏像を彫る仏師の仕事も激減した。それは木彫の衰退を意味した。多くの木彫家は象牙彫に転じたが、高村光雲のみは、木彫まもった。その光雲は東京美術学校の教授になり、後進を指導する。光雲の弟子の一人が平櫛田中である。

この名前は最近の「日経新聞」の連載でも見たし、様々なところで目にしている。優れた木彫彫刻家として有名だが、百七歳という長寿を全うしたこともよく話題になる。1872年(明治5年)生まれで、没年は1979年(昭和54年)。この田中さんは、「六十、七十は洩垂れ小僧 男盛りは百から百から」というよく聞く言葉を語った人物でもあった。

年譜によると、72歳で東京美術学校の教授になり、77歳で東京藝術大学の教授。そして93歳で名誉教授、という不思議な肩書きと年齢の関係がみえる。70を超えて母校の教授になり、90歳で文化勲章をもらったこともあり、その3年後に名誉教授に推薦されている。

残っている映像で百歳を超えた日常が紹介されていた。彫刻の題材を探すためもあって、ハサミを片手に新聞を切り抜く姿があった。とにかく興味が多岐にわたり、好奇心とバイタリティに溢れた人だったらしいことがわかる。家族

の証言によると、早起きで午前2時には起きて本や新聞を読み、6時から着物を着て洗面、朝食。その後庭での30分間の散歩。午前中は居間で本を読み、手紙を書く。午後は書道。就寝は午後9時、という充実した日常だった。

百歳を超えてもなお自らの天職のレベルを向上させるため、丹念に新聞を読み、情報に敏感であることに頭が下がる思いがする。超高齢になってもやるべき仕事があるということは幸せであると、つくづく思う。

「田中語録」というような本も編まれているように、この人の言葉はなかなか良かったらしい。

「いまやらねば いつできる わしがやらねば たれがやる」

「実践、実践、また実践。挑戦、挑戦、また挑戦。修練、修練、また修練。やってやれないことはない。やらずにできるわけがない。今やらずしていつできる。やってやってやり通せ」

という、やる気が出てくるような心構えの書も、この美術館で見ることができ

○一番の苦心は「おまんまを食べること」

平櫛田中の代表作として有名なのは、現在国立劇場のロビーに展示されている「鏡獅子」である。鏡獅子は歌舞伎舞踊「春興鏡獅子」の略称である。新歌舞伎十八番の一つだ。

全長2メートルを超える作品で、完成までに援助者の事情や戦争などもあり、結果的に20年以上の歳月を費やしている。6代目尾上菊五郎の絢爛豪華な舞の姿を木彫りで彫り、その上に色彩をかけたもので、日本彫刻の最高峰といわれる作品である。1937年（昭和12年）には舞台に25日間通い続け、場所を変えながら6代目菊五郎の姿を観察し続けたというエピソードも残っている。

菊五郎は「踊りの名人の眼だ」と田中の観察眼を評していた。踊りにおける肉体の形、重心のかけ方、筋肉の緊張の度合い、そういった踊りの要所をこの彫刻家はつかんでいたとの感嘆の言葉である。菊五郎は裸で稽古をしたのだが、田中はまずその姿を彫り、その上に衣装を着けるといった凝った方法でつくっていった。この寄木細工の作品は80歳を超えてやっと完成する。このとき菊五郎はすでに他界していた。

「形は小さいながら堂々として居る。随分細かい点まで気を配りながら、ちっとも小さな感じにならない所は流石である。衣装の要所要所が十分に引緊って居て気落ちがいい、緩急共に衣装が生きている。殊に突張った袖口の緊張や袴腰の据わりのたしかさに感心した」

発表後、すぐに西洋美術史家の児島喜久雄教授が田中の作品をこう評していた（平櫛田中展によせて「日本美術」第95号）。

政府から田中に二億円で譲ってくれという申し出があったが、それではあの世で菊五郎に合わせる顔がないからとって、永久貸与という形の寄付にした。現在の価格で60億円だと、学芸員の藤井さんが教えてくれた。1958年（昭和33年）の院展に出品されたその作品は、今は国立劇場のロビーで多くの人に感動を与えている。

田中は、文化勲章をいただけるなら、「鏡獅子を作ったときに頂戴出来たら一番うれしかったのだが……」と述懐している。文化勲章伝達式では、天皇陛下から「一番苦心されたことは」と聞かれ、「それは、おまんまを食べることでした」と答えて話題になった。

○岡倉天心の薫陶を受け、開花する

田中の彫刻の方法は、粘土でつくった形を石膏でかたどりし、特別の「星取り機」というコンパスで木にうつしとるという工法で、星取り技法と呼ばれた。日本の伝統木彫り彫刻の中に西洋流のやり方を取り入れた手法である。

代表作の一つ「尋牛」は、山の中に牛をたずね求めていく十牛図の古事からとった作品で、岡倉天心から絶賛された田中の出世作である。

日本彫刻会の会長となった天心は田中の心の師となった。ブロンズの「岡倉天心胸像」には尊敬の念を込めて金箔を塗っている。天心の口癖は「芸術は理想の表現である」だった。

彩色豊かな「源頼朝像」、そして「良寛和尚」「月琴」「陶淵明」「聖徳太子像」「聖観世音」「降魔」「気楽坊」「釣隠」などの名品を見て回る。仏教説話や中国の故事などを題材とした精神性の高い作品が多い。木彫りは自然な感じがとても気分を落ち着かせる。

併設の記念館は、平櫛田中が98歳のときに書いた書「いまやらねば いつできる わしがやらねば たれがやる」にちなんで、「九十八叟院」という名前をこの家につけていた。入り口には、「千寿」という大きな赤い書が掲げてあった。茶屋、アトリエ、展示室。坪庭、中庭、庭園。記念館は368.84平方メートルというから100坪以上の広さである。ちなみに展示館は、その約2倍の781.02平方メートル。総敷地面積は1789.72平方メートルだから、542坪強だ。

記念館の入り口に、巨大な木が立っている。直径1.9メートル、5.5トンの巨木で、樹齢は500年。98歳で小平市に転居した際、向こう30年間は創作活動が続けられるよう原木を用意してあった。ということは、130歳まで仕事をするつもりだったということになる。それを証明するような逸話もあった。田中は、同じく天心の薫陶を受けた日本画の横山大観、地唄舞の武原はん、そして画家・

丸木スマの彫刻をつくろうとしていた。

本間正義氏が、「確か安井曾太郎画伯の描いた『横山大観像』が展示してあり、(田中)先生はその前にとまって、じっと見ておられたが、いきなり、『(大観)先生もうしばらくおまち下さい。きっとそのうちに作りますから』といわれた」と回想している(『平櫛田中作品集』)。

彫刻家たちが作品が売れないと苦しさを訴えたとき、後に生涯の師となる岡倉天心から「諸君は売れるようなものをお作りになるから売れません。売れないものをお作りなさい。必ず売れます」と言われている。このとき田中は、売れないものをつくるのは雑作もない、自分の好きなものをつくれればいいのだ、と理解した。そのアドバイスの結果誕生いたのが、「活人箭」「法堂二笑」「維摩」などである。その後、50年以上経って田中は、「省みて、先生に背くことの多いのを恥じます。まことに恐ろしいお言葉であると、しみじみ感じます」と言っている。

岡倉天心は高村光雲に、「絵画の面では、どうにか糸口がついた、しかし彫刻の部では、なんにも手をつけていないので木彫家たちと会ってみたい」と言う。そこで田中ら6名が天心を訪ねたときに天心からもらったのが先の言葉である。それがきっかけで後に天心を会長とした日本木彫会が結成される。

天心は「活人箭」に対して、『あれに弓矢を持たしている、なんで弓矢を持たしたか』『弓矢はいらぬ。弓矢を持たしたって、弓矢はいつまでもあるもんじゃなし、いらぬのです。ただこれだけでよろしい!』(といいながら、弓を引くポーズをとる)と肌ぬぎにならばかりです。『私は去年フランスに行ってきました。ロダンにも会いました。あのじいさんはそれをやっております。偉いじいさんですよ』とおっしゃいました。そして『あんなことでは死んだ豚も射られやしない』と叱ったという。

90歳のとき、田中は「五浦釣人」という大作の天心像を作成している。天心が好きな鯛釣りをしているところをうつしたものだ。天心に直接指導を受けたただ一人の生き残りの彫刻家として、天心生誕百年を機に仕上げようとしたものだ。田中は他に天心の胸像をブロンズで七点ほど制作している。

天心を敬愛していた田中は、東京芸大構内の六角堂にある「岡倉天心像」(田中作)に、「登校のたびに最敬礼していた」という。田中が回想するとかならず天心についての回想となった。田中は一日として師恩を忘れなかった。

「先生はすべてがそのように人柄が大きい感じの方でしたが、なされることも大きかったのでございましょう。後年作品を批評していただいた時も、決して細かいことはおっしゃいません。ただ荒く、つまんだようにポツンと批評してくださいそれがドシンとくるのです」「ごく簡単な要領のいい暗示を与える方で

した」(『鉄砲虫』にった浩・天心社刊行会)

と、田中は天心のことを回想している。

第一回の日本彫刻会展では「活人箭」を厳しく批評されたが、第二会展では、「平櫛さん。よくできましたよ」と言われ、不覚にも田中は涙を流している。

芸術には妙な運動や取引があってはならないが、現実にはある。それを田中は歯に衣着せずどしどし口にするほうであり、風当たりが強かった。

天心は「言いたいままを言っている平櫛さんは、一生借金の利息に追いかけてられているようなものだ」と言い、その後「実は自分もそうなのだ」と笑っていた。

そして田中は意外なことに、器用な仕事は大嫌いという。

自分には修業時代に器用な仕事がかっついていて、それをとるのに苦労している。習い初めの五年なり三年なりは、「無理矢鱈にでも木をこなすことを根本にせなきゃいかんのです」と語っている。

「絵に日本画、西洋画があるように、彫刻にも日本彫刻と西洋彫刻の区別があつてよい、塑像と木彫は全然性質が違うものだ」

「天心はよく、芸術の表現は、“理想”にあるということをいったが、その“理想”をいつてくれる彫刻家は田中だけだと語っていたという」(『平櫛田中彫琢大成』講談社)

天心は指導者であつて、実作は弟子たちが行った。絵画には大観はじめそうそうたる人物が出現したが、彫刻の分野にはなかなか人を得なかった。田中に対する天心の期待があつた。

○「実践、実践、また実践」

『鉄砲虫』(にった浩・天心社刊行会)という平櫛田中の伝記がある。この本には本人や家屋、そして作品の写真が貼り付けてある。不思議なことにそれらは印刷ではなく、本物の写真である。また、書いてある文章は和紙に印刷されている。表紙は染色家・芹沢銈介で、最初のページに武者小路実篤が田中の人となりを書いている。

「実に純粹に自分の作品に精魂をそそぎこんであます処のない感じを受ける。百一歳だというのに歩く事は僕より達者で、自分の仕事に没頭して、自分の仕事以外は何も考えていない、実に国宝的存在に見える。逢っていると微笑ましくなる」

これが同時代を生きた武者小路実篤の印象だった。

「平櫛田中先生百寿祝賀会」という、弟子たちが企画した会の案内状がある。その挨拶文の中に「壮者も及ばぬおすこやかにして本年目出度く百歳を迎えられました」という文章がある。

百歳を超えた日常が、本人と家族の口で次のように語られている。

「わしもとうとう満百歳。まだまだ仕事が残っている。朝から工房 晩飯がうまい 野葉のかきあげ小えびが二つ 葡萄酒ぼちり 粥一椀 とろりまぶたが重くなる ベッドにごろり たかいびき 夜中に小便二、三回 あさまでぐっすり夢を見ず 死ぬこと忘れた田中団兵衛」

百四歳 「午前三時 起床、七時半 食事約三十分（八時頃） 書道 十時～十一時半、ティータイム まっ茶、正午 昼食、その後歩く練習、午後三時 おやつ、その後入浴、午後六時半ごろ 夕食、八時 就寝、すぐイビキをかいで寝る」

田中は百歳からは、「人間徒多事、田中徒百歳」を自粛の言葉として制作の日々を送っている。

平櫛田中は、若い時代は不遇であった。1907年（明治40年）に開かれた東京博覧会で、彫刻部の審査員の不公平の非を鳴らして、出品の取下げ運動があった。代表者の一人として文部次官と面談したが、憎まれることになった。

本人も「この騒動が私を終生、裏路を歩かせる因となりました」と述べている。こういったこともあり、長屋の家賃のため、銭湯にもめったに行けないという貧乏暮らしが50歳過ぎまで続き、結核で長男と長女を亡くす。

60歳あたりから名が売れ出して、ようやく生活が安定してくる。これも生涯の師と仰ぐ岡倉天心との出会いがきっかけとなった。天心の批評、叱咤、激励、そうした本質をえぐる一言一言を田中は受けとめ反芻し、作品の中に投影していった。師との出会いが運命を変えたのである。この人の言葉でもっとも人口に膾炙しているのは「六十、七十は洩垂れ小僧 男盛りは 百から百から」という言葉であるが、それが真実の感慨だったのだろう。

生活の安定を得た田中は、その後、傑作「鏡獅子」を完成させるなど大輪の花を咲かせながら、天職を究めていった。荻原守衛31歳、菱田春草37歳、青木繁29歳というように同時代を生きた芸術家たちの華やかで短い人生や仕事と比べると、遅咲きながら平櫛田中の仕事人生の長さとその大きな業績に打たれ、肅然とする。

「多摩」人物紀行 ④

宮崎駿（三鷹市）—三鷹の森ジブリ美術館

「ナウシカ」「ラピュタ」「トトロ」「千と千尋」「もののけ姫」と続く名アニメーションの数々を世に送り出した偉大なアニメーション監督・宮崎駿の記念館はまだない。まだ現役だから当然だが、この人物の志を知りたくて「三鷹の森 ジブリ美術館」を訪ねた。

中央線の三鷹駅で降りて、太宰治が自殺した玉川上水に沿って歩き山本有三記念館を過ぎて角を曲がると井の頭公園の一角にあるジブリ美術館に着く。この美術館には宮崎駿本人を知るための直接の資料はほとんどなかったが、宮崎駿の名前は館主という肩書き表示で存在していた。

広い空間をどのようにまわるのかと考えていたら、「決められた順路はありません。順路を決めるのはあなたです」「この空間を心から楽しみ『迷子』になってくれる主人公を、心より歓迎いたします」との表示がパンフにあった。ここは珍しい日時指定の予約制の美術館だが、春休みだけあってやはり子ども連れの家族が多い。どの子供たちの顔も楽しそうだ。

3階建てのジブリ美術館。半地下には映像展示室「土星座」、1階は中央ホール、2階は常設・企画展示室で1973年のハイジなど作品の一部が展示されている、また映画づくりの現場も見せてくれる。アニメーターの条件というのが書いてあって「絵がかける」「人や物の動きを理解し表現できる」「作業能力がある」そして「職人的な素養」、加えて「生命への愛情」と書いてあった。3階は、ネコバスルーム、ショップ「マンマユート」、そして外付けのラセン階段をのぼるとまもり神のいる屋上庭園に着く。1階のパティオ（中庭）と3階の鉄橋からは「麦わらぼうし」というカフェにいける。

買って帰った本によると、「やはり子ども向きのいい映画を作るっていうスタジオにしておこうと思うんです」との記述がある。子供達に励ましや世界を美しいと思うすべを教えようとしている。未来への希望を伝えようとしていると感じる。

宮崎駿はアニメの分野では、先達の手塚治を批判する。手塚のアニメは日本の漫画から出発したのではなく、ディズニーから出発したという分析だ。宮崎駿によればディズニーは入り口と出口が同じだという。入った低さから少しでも高くなって出すようにしたいのが宮崎駿の考え方だ。だからいつの間にか階段を昇ってしまうようなチャップリンの方を好んでいる。

盟友のアニメーション監督・高畑勲の宮崎駿観が、仕事に向かう宮崎駿のすべてを語っているように見える。

「宮崎駿はすごい働き者である」「宮崎駿の頭は大きい」「宮崎駿とのキャッチボールは大変である」「宮崎駿の頭脳はいつも忙しい」「宮崎駿は苦勞人である」「宮崎駿は極端な照れ屋である」「宮崎駿は平気で暴言を吐く」「宮崎駿は思い入れの人である」「宮崎駿はとことん具体性を重視する」「宮崎駿は克己の人である」、...

過剰表現主義と動機の喪失が日本のアニメーションを腐らせているという宮崎駿は、継続的にアニメーションを作り続ける母体としてスタジオ・ジブリをつくった。表現者であると同時に、経営者としてこの組織を続けることにも力を注がねばならない。時代を駆け抜けて大きな存在になってきた宮崎駿も、もう70歳に近い。ジブリ美術館の総合デザイナーだった息子の宮崎吾郎は、父の後を継いで「ゲド戦記」に続いて「コクリコ坂から」を監督するなど必死で追いかけてはじめた。

宮崎駿は「日本を舞台にした時代劇」というテーマを持っているという。私たちはこの人物と同時代を生きて新作を最初に観ることができる幸せを、いつまで持ち続けることができるだろうか。

「多摩」人物紀行 ⑤

村野四郎（府中市）—村野四郎記念館

私は、はじめから、文学というものは 実業による経済的な防波堤の内側でなすべきものと決めていた。

○一冊も売れなかった処女詩集「罨」

「府中市郷土の森」という広大な市民の憩いの場がある。博物館本館、たくさんの由緒ある古い民家群、旧府中町役場庁舎、旧府中郵便取扱所、そして桜の木、季節ごとの花々など、四季の移ろいと歴史に触れることができる大きな空間である。

この一角に旧府中尋常小学校の校舎が復元されている。教室には昔使われていた教科書などが展示されていて、懐かしさを感じさせる空間である。

この一階に詩人・村野四郎（1901年～1975年）の記念館がある。この名前にはあまり親しみはないかもしれないが、「ブンブンブン ハチがとぶ おいけのまわりに のぼらがさいたよ ぶんぶんぶん はちがとぶ」（ドイツ唱歌）という童謡や、卒業式でよく歌われる「巣立ちの歌」などの作詞者といえば、少しイメージがわいてくるだろうか。府中出身の村野四郎は、市内の小学校、中学校の校歌を六点作詞している。

村野四郎は武蔵野の土地に根ざす裕福な商家の生まれで、生家は父の代には酒、食品、建築資材、舶来のスタンダード石油の特約店にもなっている。村野家に兄弟は12人おり、7人の男子のうち、四郎はその名の通り四男である。府立二中では、鉄棒と柔道が得意。卒業時は柔道部主将。運動に対する関心と経験が後に詩集『体操詩集』を書かせた。

次郎は北原白秋門下の歌人（後に「香蘭」を主催し生涯歌作を続けた）、三郎は西条八十門下の詩人（独立後、商売の傍ら詩集を出版）であった。四郎は詩に関心があったのだが、三郎のつくる詩に圧倒されて、仕方なしに俳句を学んだ。

少年四郎は、文学の道に進もうとはしなかった。一年目の受験は東京商科大学を失敗し、二年目は慶應義塾大学の経済学部合格する。文学は好きではあったが「文学で飯を食おうなどとは思ってもいなかった」と述懐している。大学では俳句の世界で頭角を現した。

卒業の前年の25歳のときに処女詩集『罨』を自費出版している。しかし部

数は300部だったが、一冊も売れなかったという。四郎の長男の村野晃一は、「生涯、詩は趣味と位置づけ、職業とは考えないというのは、学部を選ぶときに決めていたとはいうものの、この事件がダメ押しになったのではないかと思います」と、後に『飢えた孔雀——父、村野四郎』（慶應義塾大学出版会）に書いている。

大学時代を通じ、詩の病はますますこうじたのだが、一方で自分の詩をまもるためには確固とした防波堤がいるという確信を持った。仕事を持って、その上で誰からも邪魔されずに詩作を極めていこうという姿勢だった。その考え方が後の詩壇の先導者をつくった。

○精神のために詩を、肉体のために実業を

1927年（昭和2年）に慶應義塾大学を卒業。秋に近衛歩兵第一連隊に入隊。結構、要領よく義務を果たしてきたようだ。それは実際の戦時中の身の処し方にも通じる。その軍隊で、板倉準三に出会う。板倉は、四郎と同年生まれ。東大文学部美術史学科卒。渡仏し、ル・コルビュジェの門に入り、1937年（昭和12年）のパリ万博日本館の設計を行う。

板倉との出会い以降、村野は自分の胸の内に描き出す詩的美空間をより意図的に組み立てるようになり、視覚的・構成的になる。

1929年（昭和4年）の春、大阪の尼崎汽船に就職するが、大阪弁になじめず寂しくて東京に逃げ帰り、理研コンツェルンの本社である理研学興業株式会社に入社する。ここから「精神のために詩を、肉体のために実業を」という考え方にもとづく長い二足の草鞋の人生が始まる。このあたりの見通しと覚悟には感心させられる。

文学者は、文学にのめり込んで生活破綻する者が多いのだが、長期的・戦略的に生活と詩作を両立させる姿には、頭を下げざるを得ない。理研は、高峰譲吉の国民科学研究所構想を、渋沢栄一らの努力で成立させた研究所で、三代目の大河内正敏のときに大きく飛躍を果たした。

実業人としての村野四郎を年表風にたどってみよう。

1937年（昭和12年）、35歳。長男誕生、会計課長。

1940年、理研電具株式会社へ転出し、常務取締役。会社は終戦と同時に活動を停止。ストライキが起こり、会社に軟禁される。そういう状況でも詩作は休まない。

1946年、戦後我が国初の詩集「天の繭」を共著で刊行。

1950年、友人と共同で、三鷹市に理研電解工業株式会社を設立し、専務取締役。

このあたりから、詩の分野で道がひらけてくる。詩の選、持論、俳句の鑑賞

など活動の幅がひろがっていく。

1966年、三男が大学を卒業。家族に対する経済的防波堤はいらないということで、理研電解工業会長を辞任する。

村野は、従業員300人規模の理研電具の社長にまでなるなど、実業にも注力している。そしてその生活基盤の上で詩作に励み、「現代詩の一頂点」（室生犀星）を極めていくのである。

○代表作「鉄棒」と「鹿」

四郎に圧倒的な影響を与えたのは Rilke である。それはハイカラ趣味の源泉でもあった。「Rilkeの詩はその都度、いつも私が辿ってきた各段階にふさわしい新鮮な示唆を与えてくれた」（「私における Rilke」）という四郎の語彙は、日本語のみならず、英語、ドイツ語も実に豊富だった。

四郎はスポーツ好きでもあった。鉄棒、柔道、水泳、スキー、登山、ボート、社交ダンス、とあらゆるものをこなした。そのスポーツ好きが『体操詩集』という詩集を生んだ。

鉄棒

僕は地平線に飛びつく
僅かに指さきが引かかった
僕は世界にぶら下がった
筋肉だけが僕の頼みだ
僕は赤くなる 僕は収縮する
足が上がってゆく
おお 僕は何処へ行く
大きく世界が一回転して
僕が上になる
高くからの俯瞰
ああ 両肩に柔軟な雲

（『体操詩集』 日本図書センター）

戦時色が強くなる中、四郎は、意識高揚のための愛国詩も書いている。「『今日においては、詩人は沈黙するか、然らずんば〇〇手となるべきである』という人がいるが、もはや、そうした選択はない。みんな〇〇手になる他はないのだ」と言い、日本文学報告会詩部会常任幹事（部会長は高村光太郎。常任幹事

三好達治ら)、日本詩曲協盟幹事、日本少国民文化協会員などの職をこなしている。

50代後半の1959年(昭和34年)に刊行された村野四郎の『亡羊記』(政治公論社『無限』編集部)は、読売文学賞を受賞する。『亡羊記』の詩を一つあげてみる。

鹿

鹿は 森のはずれの
夕日の中に じっと立っていた
彼は知っていた
小さい額が狙われているのを
けれども 彼に
どうすることが出来ただろう
彼は すんなり立って
村の方を見ていた
生きる時間が黄金のように光る
彼の棲家である
大きい森の夜を背景にして

この詩に対して伊藤信吉は「いま生と死が入れかわろうとする一瞬のあわいに、眼前の死の谷へ射ちおとされようとする瞬間に、夕陽をうけてきらめくあざやかな瞬間!」という解説を書いている。この詩を読むと眼前にその光景が浮かぶ。やわらかいが緊張感にみちたあやうい一瞬の光景を切り取った見事な作品だと思う。

ところで、詩人の登竜門としてH氏賞(日本現代詩人会が主催)という賞がある。村野が旧知の平沢貞二郎と1950年(昭和25年)に会ったとき、平沢から「青春時代を充実させてもらった感謝に資金を提供したい。ただし名前は伏せてほしい」という申し入れを受ける。平沢は戦前はプロレタリア詩人会を結成する詩人だったが、弾圧を受け、実業に千年し、経済的に余裕があった。日本現代詩人会の責任者だった村野は、H氏賞を創設し、そうそうたる詩人を世に送り出す。今では詩壇の芥川賞といわれている。

○実業人生を送りながら、詩の世界を歩む

60代半ばで、ようやく実業界から引退するが、その前あたりから村野は、芭蕉の存在に惹かれてゆく。それまで村野は新即物主義や実存主義といった西欧

の存在論を根拠に詩を追究してきたが、17世紀後半の日本に芭蕉が存在していたことに大きなショックを受ける。

「日本の現代詩人たちが、海外の詩的論理ばかり眼がくらんで、自分の足もとにある日本固有の古典の価値にほとんど盲目同然であったところに、今日の現代詩のひ弱さがあることを、かつて私は、どこかに書いたけれどこれは詩にかぎったことではなく、日本の文化全体についてもいえると思う」

（『飢えた孔雀——父、村野四郎』村野晃一・京王義塾大学出版会）

こういう文章を村野は残しているが、まったく同感させられる。文化のみならず、行政も起業もジャーナリズムも、同様の病にかかっている。

芭蕉は、旅で神社仏閣に行きあうたびに句を詠んでいるが、神や仏に帰依した作品はまったくない。ただ美への執念だけが芭蕉の旅ごろの原動力だった。己の美意識だけを頼りに奥の細道をたどり、実存を生きた。村野も長い西欧遍歴を経て、また日本に回帰するのである。

村野は「わたしは、今までもまた、たえず飢えた美食の単独者であることを、無上の榮譽と考えているものです」と『藝術』のあとがきで述べている。美とは詩のことである。

「白州によって火をつけられ、（荻原）井泉水によって磨かれ、（萩原）朔太郎によって解放されて始まった旅は、幾多の芸術思潮を経巡り、芭蕉に再会し、自分もふたたび旅に出たのでした」と長男の村野晃一（元セイコー株式会社代表取締役社長・1937年生まれ）が詩人・村野四郎を総括している。

四郎自身も、白秋を以下のように総括している。

「もっと現実的な現実の中に生きて苦悩する人間の姿はどこにも描かれていない。そしてその感情は全く人間的連帯感に触れているところがない」

「白秋は、たしかに近代詩の偉大な完成者ではあったが、彼は決して現代詩の真の先駆者ではなかった」

村野は二足の草鞋をしっかりと履いていた。

「私は、はじめから、文学というものは実業による経済的な防波堤の内側でなすべきものと決めていた」

村野四郎は、その思いを日々の精進の中で遂げていった。実に見事な戦略的な人生である。この人の生き方は、もっと研究する価値があると思う。

実業人生を送りながら、詩の世界を一步一步歩んでいった村野四郎には、48

歳あたりからようやく詩の世界での道が見えてくる。そして 60 代の半ばになって前を歩く芭蕉という大きな存在に気がつき、さらに詩の世界に没入していった。

二足の草鞋を履きながら、本業以外のライフワークの世界を少しずつ育てていき、道を見つけ、詩人として大成し、名を残す。まさに遅咲き人生のモデルである。

「多摩」人物紀行 ⑥

水木しげる（調布市）—鬼太郎茶屋

調布の深大寺の門前に「鬼太郎茶屋」がある。その 2 階で「水木さんと調布展」という企画をやっている。水木さんとは、もちろん 1959 年以来 50 年以上も調布に住む妖怪漫画家の水木しげるさんである。「ゲゲゲの女房」の亭主と言った方がわかりがいいかもしれない。水木さんは 2008 年 3 月には調布市の名誉市民になっている。この鬼太郎茶屋は 2003 年 10 月に開店した。参道の入口近くにあり、そば屋を改造した二階建てである。

2 階に登る階段から妖怪だらけだ。水木しげるの発明したあらゆる妖怪が狭い空間にひしめいている。そしてうっそうと生い茂る緑の木々を堪能できる木製の「癒しのデッキ」でも、さまざまの資料を見ることができる。等身大の水木さんの写真が立っており、そこに出身地や身長、などさまざまのデータが記されている。その中に、「幸福の 7 カ条」があった。

「成功や栄誉や勝ち負けを目的に、ことを行っってはならない。」「しないようではいられないことをし続けなさい。」「他人との比較ではない、あくまで自分の楽しさを追及すべし。」「好きの力を信じる。」「才能と収入は別、努力は人を裏切ると心得よ。」「怠け者になりなさい。」「目に見えない世界を信じる。」

一階の妖怪ショップ「ゲゲゲの森」で「日本妖怪大全」「水木しげるワールドの妖怪たち」「水木さんの幸福論」を買う。また、水木さんの言葉を背中に書いた T シャツも購入する。「怠け者になりなさい」という T シャツが気に入ったが、サイズが小さ過ぎるのと大き過ぎるのとしかない。あまり勤勉にやっていると幸福になれないかも知れないと思ったのだが、ないからにはしょうがない。「のんびり暮らしなさい」の方を買う。私は怠け者になってはいけない、と水木さんから言われたような気がした。

帰って、「水木さんの幸福論」（日本経済新聞社）を読んだ。日経新聞に連載した「私の履歴書」を中心に「水木さんの幸福論」と「わんぱく三兄弟、大いに語る」と「鬼太郎の誕生」という漫画が付いている。参考になったところを抜き出してみる。

「筋を考えるのが漫画家の生命線です、、、売れなかった時代でも、原稿料の大半は、漫画の筋を考えるのに役立つような本とか、妖怪の作画のための資料とかを買い込むのに使っていました。」

「妖怪をリアルに再現するためには、表情、動作、背景などを入念に描き込

まないといけない。資料を探し、文献を読み、想像力を働かせる必要もあって、総合力で作画に取り組まないといけない、、、」

30年近く前、「知的生産の技術」研究会で「私の書斎活用術」（講談社）という本を出したことがある。私はこのプロジェクトの責任者でもあったが、16人の著名人の書斎を訪問してまとめた。このとき、調布の水木さんの自宅を二度訪問している。確かお寺の墓場の隣に家があった。そのお墓をバックに楽しい話を聴かせてもらったが、その時「この人は本当は妖怪なのではないか」という疑問が頭をかすめたことを思い出す。

妖怪のたくさん入った引き出しをみせてもらった。新しい妖怪をつくるには、いくつかの妖怪を組み合わせるのだとの説明だった。また、廊下には南方から買ってきたお土産の妖怪達が並んでいて気持ちが悪かった。

その時、やはり「幸福」についての言及があった。天国はどこにあるのかという問題意識だった。そのときのテーマが「水木さんの幸福論」になったのだ。